

台湾の宗教政策と人々の宗教信仰活動：シャーマニズムを中心として

玉, 貞月
西南学院大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2340969>

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.105-111, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



台湾の宗教政策と人々の宗教信仰活動
—シャーマニズムを中心として—

王 貞月
(西南学院大学大学院)

I. はじめに

現代台湾社会において台湾シャーマン・タンキー（童乩）は民俗医療の役割を果たしている重要な人々であると考えられる。いわゆるタンキーによる民俗医療とは、タンキーがクライアント（以下、問神者）の必要に応じて、神霊と交流できる能力（以下、通霊能力）を使い、問神者に神霊との

交流機会を与え、あるいは神霊の指示を伝えることにより、問神者本人またはその家族の病などを治療することである。

台湾社会において、自ら通霊できる神霊の寺廟で活動しているタンキーは比較的少なく、その大半は自分で祭壇（以下、神壇）を建てて活動を行っている。また、台湾社会で盛んに祭られている神霊の多くは、タンキーの様々な活動によってその信仰範囲

や宗教的な地位などが確立されてきた。しかし、台湾の宗教政策や宗教概念ではタンキーに関する活動を宗教として認めていない。このことは、台湾社会における政策上の宗教規定や学者などによる宗教の定義、現代台湾民衆の宗教観などと深くかかわっていると考えられる。

本稿ではまず、近代の台湾社会において、特に政策的、学術的および一般民衆という三つの範疇から、各々の宗教観を整理する。次いでフィールドワークの結果に基づき、台湾シャーマニズムの信仰の実態、社会的役割およびその動向を明らかにする。最後に、政治的・学術的に規定された近代的な宗教観と一般大衆によって実践されている宗教活動との間に何故それほど大きな隔たりが存在しているかを探求することを試みる。

II. 台湾宗教の歴史変遷

台湾の宗教政策および台湾民衆の宗教信仰活動は、台湾社会の歴史的変遷、特にこれまで400年あまりの政権交代や漢民族の移住などに深く影響されている。台湾への中国人の移住は、明末清初期に鄭成功の反滿清民衆軍が台湾南部へ進出してから本格化した〔酒井 1992：11〕。鄭氏政権（1661～1683年）は泉州府中心の福建人を基礎とした移住民で、彼らの移住と共に自らの信仰形態を台湾に持ち込み、今日の宗教信仰形態の土台を作り上げた。清王朝の統治時期（1683～1895）には、福建の閩南や広東東部の客家の移住民が相次いでそれぞれの習俗や宗教信仰を台湾へ持ち込み、両者の紛争期をへて、清末までによりやく融合と交流によって、安定的な宗教文化が形成された。しかし、日本の植民地統治期（1895～1945）特に日中戦争後、日本政府が皇民化運動など一連の宗教政策を行ったた

め、台湾宗教は動揺期を迎えた。

1949年に蒋介石を中心とした中華民国政府が台湾に移ったとともに、中国本土からの各宗教および中国で宣教したキリスト教などの西洋宗教も、一斉に台湾に入り込んで積極的な宣教活動を行った。それ以来、台湾社会においては中華民国憲法第13条「人民有信仰宗教之自由（人民は宗教信仰の自由がある）」という憲法上の規定のもとで、各宗教が自由に発展し、その信仰活動も盛んになった。しかし、それには国の政策に違反しないことおよび善良な習俗を害しないことという前提条件があった〔瞿 1992：11〕。台湾内政部（日本の内務省に相当する）は「査禁民間不良習俗（民間での不良習俗を取り締まる）」（1953年）という法規を引用し、タンキーなどを厳しく取り締まった。1987年になると、「台湾戒厳令」が解除され、さらに李登輝が台湾での最初の台湾人総統として就任して以来、台湾社会での台湾化意識がますます高まっている。台湾タンキーに関する活動はこうした台湾意識の向上という波に乗り、台湾民俗文化の一現象として認められつつ、またその社会的な役割も次第に認識されるようになった。しかし、その活動は依然として政府関係者に非難され、マスメディアに批判されているが、法律（寺廟監督条例）の拘束を受けないことはない。次節では、これらの現象を形成した背景を明らかにするために、政策的、学術的および一般民衆という三つの範疇から、各々の宗教観を整理する。

III. 現代台湾社会における「宗教」

1. 宗教に対する政策規定

台湾社会において、宗教を監督する唯一の法的な規定は1929年に制定された「寺廟監督条例」である。この規定は国民党政府が大陸政権を失って台湾に移った1949年以

前に中国本土で制定されたものであり、当時の台湾宗教事情や社会状況に適しないことは明らかである。台湾内政部は1978年によりやく「宗教法」および「宗教保護法」の草案を作り、宗教に関するいくつかの法律を何度も制定しようとしたが、すべて失敗に終わった。その当時、「これらの法律草案を制定する時、(政府の) 関係部門が(当時の台湾の) 複雑な宗教状況を深く理解していないため、条文の一部が不適切であるとして各宗教団体に反対され、立法の手続きを完成できなかった」[瞿 1992: 15]。2001年には、「すでに最終的な立法手続きに至ったが、国会議員の改選があったため、最後の段階で新任議員に否決された。彼らは宗教が(憲法上において) 本来自由であるので、法令による管理は必要がないと主張し」、また「宗教団体からの反発もある」と台南市市役所の民政局礼俗課の朱棟氏が述べた。宗教の規定について朱棟氏は「長い間、法令は変わらないが、その適用の仕方が変わる」と述べている。つまり、宗教信仰に関する法律は表面的には変わらないが、実際には政府の態度によって実質的に変化していると思われる。

《重修臺灣省通志》の分類によれば、タンキーは「…道教の範疇に属すべきか否かはいまだにはっきりしない」[瞿 1992: 15]。また、「寺廟監督条例」の第1条¹⁾によれば、ほとんどのタンキーの活動場所である神壇は、「寺廟」ではないため、「寺廟監督条例」の適用対象ではない。しかし、1987年を境に、タンキーに関する活動はもはや取り除かれるべき不良習俗や迷信活動ではなく、次第に民俗文化の一現象として認識され、またその社会的な役割も徐々に認められている。実際にはこうした現象は、少なくとも台湾学界の影響をも受けていると思われる。以下、これについて詳しく議論することにする。

2. 学界における宗教の定義付け

台湾の学界において、如何なる概念で台湾の複雑な宗教信仰形態を定義するかは長年論争されてきた。現時点で最も有力なのは、次のような見解である。「いわゆる『宗教』とは、明確な教義、教主、經典、執事などが存在するということである。(それは) 完備している制度と規律を守る一連の規範があるため、一部の人がそれを『制度化宗教』と称している。一方『民間信仰』は庶民の信仰形態であり、一般的に制度化宗教の必要な条件を持っていない。…この種の信仰は厳密な制度と規範が存在しないため、一部の学者がそれを『散漫化宗教』とよんでいる」[李 2002: 7]。したがって、台湾タンキー活動は台湾学界での分類によると、「宗教」というよりもむしろ「民間信仰」活動の範疇に入る。この種の信仰は、宗教として認められなくて小伝統と軽視される傾向があるにもかかわらず、「台湾社会において、最も多くの人(85%以上)に信仰され、しかも民衆の風俗習慣を左右する文化現象である」[董 1997: 51]。

戦後57年になった今日の台湾学界において、ほとんどの研究者は台湾の生まれ育ちであるため、台湾庶民文化に関する研究を重視するようになった。つまり、彼らの立場は学者だけではなく、台湾社会で暮らしている一般民衆でもある。前述したように、台湾の民俗文化、宗教信仰などの側面においてタンキーとその活動場所である神壇が最も活躍しているにもかかわらず、何故政府政策や社会的側面において常に批判の標的になっているかは、多くの疑問を残している。

3. 台湾民衆にとって宗教とは

本来、漢民族は仏教や道教からの多くの神様を信仰し、さらに自分の祖先やあらゆる超自然的なものを祭っている。この状況

は今でも続いているが、キリスト教などの宗教が伝来するにつれてますます複雑化している。確かに台湾民衆の宗教観は宗教政策や学術上の論議にも影響をうけているが、むしろ西洋宗教からの影響のほうが大きいと思われる。というのは、民衆にとって西洋宗教を布教している宣教師の存在と彼らが持ち込んだ宗教教義などが身近なものだからである。要するに民衆の多くは西洋的な宗教に直面してから自らの宗教観を形成し、本来の信仰活動にも気づきはじめたと考えられる。

例えば、「われわれは一体どのような宗教を信じているか。履歴書を書くとき、いつも宗教欄に何を書けばよいのか分からない」[黄 1997: 6] という悩みがあるのは否定できない。「『仏教』と書くべきか。…如来や観音を拝んでいるが、そのほか王爺や媽祖も祭っている。…『道教』と書くべきか。祭っている神様は玄天、関帝以外、仏陀、お地蔵様もある」[黄 1997: 6]。その結果一部の民衆は、明確な教義などが完備している制度的な宗教に依属したくない、あるいは自由自在に各宗教に出入りしたいという理由であえて「無宗教」を選択することがフィールドワークで確認されている。

「多くの無信仰者は決して信仰がないわけではない。彼らは依然としてある程度中国的な宗教信仰を堅く守っている。…自ら無宗教と自称するにしても、その本当の意味はどの制度化宗教も信仰していない、あるいは既存の儀礼作法に共感をもっていないため、それに参与したくないにすぎない」[林 2000: 3]。台湾タンキーの信仰活動は、まさにこのことを反映しており、人々に実践されている宗教信仰活動を観察する最もよい対象になると考えられる。

IV. 人々に実践されている宗教信仰活動

この節では、主に筆者の現地調査結果²⁾を用いて、タンキーの信仰の実態や社会的役割、今日の動向を明らかにしながら、台湾の人々に実践されている宗教信仰活動を検証することにする。

1. 台湾シャーマニズムにおける信仰の実態

筆者の調査結果によると、台湾タンキーに対する台湾民衆の認識程度については、ほとんどの民衆が何らかの形でタンキーのことを知っていた。しかし、閩南人、客家人および外省人のタンキー信仰に対する認識経緯や接触体験および見解などにおいては大きな差異がみられる。具体的には、閩南・客家人がしばしばタンキーに肯定的な評価を与えているのに対し、外省人は否定的な態度を示す傾向がある。

台湾民衆の間神活動は常に迷信や非理性的と批判を浴びている。しかし、タンキー通霊現象の真偽に対して100%という絶対的な判断を下す少数の民衆(約10%)を除き、大部分の台湾民衆はこうした神霊現象に対して懐疑的な立場をとっている。彼らはタンキーの通霊する神霊が台湾民間の宗教信仰系統に属しているか否か、その影響力と職能、知名度、信者の人数などを判断基準として、タンキーの通神現象の真偽を見分けようとしている。結果的にその判断が正しいかどうかはまた別問題であるが、タンキーの信仰活動において、民衆個人は決して盲信しているわけではなく、あくまでも自分の生活背景とタンキーとの接触体験に基づいてそれを理性的かつ実証的に判断しようとしている態度をとっている。ちなみに、問神者の家庭で祭っている神の多くはその家庭が通っているタンキーの通霊する神と一致している場合がほとんどであ

る。つまり、タンキーとその信仰活動は台湾社会における根源としての信仰文化を表し、しかも民衆の主導による信仰形態および民衆個人の理性的かつ経験的な信仰実態という特徴をもっているため、いまだに民衆の家庭での日常的な信仰様式として生き残っていると思われる。次いで、タンキーの活動が担う社会的役割、特に「民俗医療」について検討する。

2. 民俗医療としての社会的役割

筆者の調査で明らかになったのは、一部の民衆がタンキーを必要とし、またその様々な役割を認めていることである。特に、タンキーの通霊能力は他の呪術・宗教職能者（道士や法師など）に取って代わることでできないものである。一方、問神者の問神内容はあらゆる人間が直面しなければならない問題（生老病死など）を含んでおり、その中では特に病に関する問題が多い。通霊能力と病とはあまり関係がないように見えるが、実際に両者は密接に関わっている。多くの台湾民衆の思考思惟において、「病」とは、単なる「身体」の障害によるものではなく、「心霊」の迷走や「悪霊」に障られることもその一因であると信じられている。「身体」の病気が重いほど、「心霊」という部分からなおさら治療を受けなければならないと信じられている。こうした考え方を具現しているのは、まさに今日の一部の台湾民衆が難病や不治の病などを治すために、タンキーを通じて神霊と交流することによって治療方法を求める行動である。

台湾の成功大学医学部の調査によると、腫瘍にかかった子供の73%は西洋医学の治療を受けると同時にタンキーの民俗医療などの代替治療法をも受けている³⁾。さらに、不妊症を抱えている台湾女性の一部は、西洋医学、漢方療法およびタンキーの民俗医療を同時に受けることもしばしばみられ

る⁴⁾。こうした現象について、筆者の調査においても同様な結果が得られている。つまり、台湾民衆にとってタンキーによる民俗医療は台湾の医療システムを補完する代替医療法の一つであると考えられる。こうした代替医療を実現するためには、タンキーの働きが欠かせないものであると思われる。

3. 今日の台湾シャーマニズムの動向

現代台湾民衆の大半が自らの価値観などに導かれて宗教信仰活動を行っていることは前述した信仰実態からうかがえる。彼らの価値観は、その個人を育てた家庭とそれを成り立たせた社会によって形成され、しかも常に時代の流れや社会の出来事に従い、内容を変えている。このことも彼らのタンキーに対する見解や宗教観を反映している。したがって、台湾民衆の家庭での日常的な信仰様式として、しかも強力な社会的役割を提供しているタンキーとその活動は、現代社会に活躍しつづけるために、一定不変の姿にとどまるわけにはいけないと思われる。

実際に、台湾タンキー自身にいくつかの変化がみられる。例えば、本来ほとんどのタンキーが男性であったことから女性タンキーの増加により男女割合が徐々に変化していること、激しいトランス状態から次第に穏やかな入神状態に移行していること、そしてタンキーに憑依する神霊の属性や種類が変わりつつあることという三つの変化が最も顕著である。タンキーの活動場所である神壇は毎年およそ10%のペースで増加し、その多くは都市に集中している [李 1999: 4]。また、いくつかの寺廟では一時期中断したタンキーの養成を再開し、自ら廟の専属タンキーを訓練し、人々の問神活動を行なっていることも明らかになった。こうした変化の原因を解明するためには様々な側面から検討する必要がある。例え

ば、女性タンキーが増加している主な原因の一つは男性偽タンキーによる詐欺事件の多発にあるとみられる。また、国民教育レベルの向上や政府の態度などによって、タンキーの激しいトランス状態はもはや歓迎されなくなる。そして、タンキーに憑依する神霊の種類の変化について、王爺、媽祖および閩帝爺の三つの神様を代表するタンキーは依然として大きな割合を占めているが、女性タンキーを中心とした「母娘信仰」が近年急速に普及してきた。

V. おわりに

最後に、本稿の最初で提起した問題、すなわち政治的・学術的に規定された近代的な宗教観と一般大衆に実践されている宗教活動との間に何故それほど大きな隔たりが存在しているかについて考えてみよう。

国民党政権の初期では、宗教信仰に対してある程度の拘束を行っていた。しかし、宗教団体からの強い反発があったため、その拘束はしだいに弱まり、いまではほぼ放任していると言ってもいい状況にある。一方、台湾の学界ではこれまでの宗教問題について主に西洋の近代的な宗教観を取り入れてきた。しかし、台湾の信仰活動、特に近代科学に批判されている呪術活動などはますます盛んになっているため、学者たちはそれに注意を払わざるを得ないという状況に直面している。その結果、学者たちは台湾民間信仰を近代的な宗教観の範疇から切り離し、それを正規の宗教として取り扱わないことにした。つまり、宗教は制度化された比較的正統・高尚・規範的なものとして大事にされるのに対し、シャーマニズムなどは非規範的なものとされて常に軽視されている。

しかし、実際に人々に実践されているのはまさにこうした宗教信仰活動である。こ

のような信仰活動は、近代的な宗教観からみるといわゆる正統的なものではないが、歴史文化の伝承と深くかかわっており、一般庶民の生活習俗と深く関連している。それは確かに厳密なルールはないが、確実に社会の変化を反映しているものである。多くの台湾民衆はこうした信仰活動を実践していることは、単に人々の生活習慣に馴染み、時代変化についていき、しかも役に立つという宗教活動を追求するだけでなく、一種ローカル文化、伝統文化などに対する肯定的行為とも言えよう。それに対し、政府や学界の社会責任や目的は、主に人々を教化、規範するというところにあるため、その政策や議論の方向性はしばしば実際の宗教信仰活動のそれと大きな差異がみられる。

これからの台湾社会においては特にシャーマニズムなど人々の宗教信仰活動に対する前述の異なった認知を如何にして受け入れるか、如何にして両方のギャップを埋め合わせるか、などが今後に残される重要な課題である。そしてこれらの課題を明らかにするためには、人々に実践されている台湾シャーマニズムの全容を解明し、特に重要な社会的役割を果たしている民俗医療メカニズムを明らかにする必要があると思われる。

注

- 1) 「寺廟監督条例」の第一条：「凡有道教主持之宗教上建築物、不論用任何名稱、均為寺廟」（道士と僧侶がいる宗教の建物では、如何なる名称を用いても、すべて寺廟としてみなされる）。
- 2) 現時点での調査では1999年7月から2002年8月までの3年間にわたって、1回のアンケート調査（有効回答数676部）と4回以上のインタビュー（被調査者：タンキー10人、問神者約50人、およびその親族の数10

人)を行い、調査記録を累積した。

3) Yeh [2000: 55-65] 参照。

4) 黄 [2002] 参照。

参考文献

酒井忠夫 1992「中国・台湾史よりみた台湾の道教」『台湾の宗教と中国文化』（酒井忠夫編）風響社。

瞿海源編纂 1992《重修臺灣省通志》〈卷三・住民志宗教篇〉臺灣省文獻委員會。

董芳苑 1997《探討台灣民間信仰》常民文化。

李世偉編 2002《台灣宗教閱覽》博揚文化。

黄文博 1997《台灣民間信仰與儀式》常民文化。

林本炫 2000年4月30日〈宗教熱潮或是信仰重組？—對當代臺灣信仰變遷的另一種解讀—〉「宗教、靈異、科學與社會」學術研討會。（<http://www.ios.sinica.edu.tw/SEMINAR/religion/>）

Yeh, C.H. etc. 2000. "Use of alternative Therapy among pediatric oncology patients in Taiwan". Pediatric Hematology and Oncology, Volume 17, Issue 1, pp.55-65.

黄郁雅 2002〈不孕症婦女民俗醫療經驗與求醫行為之研究〉南華大學生死學研究所碩士論文。

李淑慧 1999〈神明住在我家隔壁—談都市神壇現象〉臺灣大學新聞研究所碩士論文。